

ああ、はずかしい私の失敗談

千葉 敦久

忘れもしない。あれは2010年冬の辛すぎる思い出。

アイスクライミングをやり始めコンペにも出るようになったころ、友人に誘われて赤岳鉱泉で行われるアイスクャンディーカップに初エントリーした。

あのころは赤岳鉱泉がどこにあるのかもよく分からず、誘われるがままついて行ったのだが、ついていった相手が良くなかったらしく死ぬほど辛い経験をするようになった。

アイスクャンディーカップは北海道から参戦すると、かなりタイトな工程になる。

仕事終わりに金曜日の最終便で羽田>翌日 AM5 時八ヶ岳登山口着>赤岳鉱泉まで登山>予選スタート

という工程で金曜の夜から寝る時間はほとんどない。

初めてのエントリーのくせに適当かつ大雑把に計画をたてて向かっていた我らは、当然のように痛い目に合うわけです。

金曜日の夜、軽自動車に二人で乗り込み赤岳鉱泉を目指すのだが、なぜか友人は登山口に向かわず無人駅で寝ようと提案。私も特に反対もせず駅の喫煙室で仮眠をとることにした。(本来そんな時間的余裕はない)

しかし夕方から降り出した雨は激しさを増し、猛烈な雨音と頻繁に通過する貨物列車の轟音で一睡もできなかった。

寝てないならさっさと出発したら良いものを、動き出す時間もかなり適当。だらだらと八ヶ岳登山口に向かい、AM6 時過ぎに到着するがそれらしい人は誰もいない。

私が友人から聞いていた話では、登山口まで車で迎えに来てもらえるということだったのにそんな車も見当たらない。

いま考えればおかしいことだらけ。山小屋まで道路があるわけでもなし、登山口に選手全員が乗れるようなマイクロバスが来るはずがない。

そもそも何時に来るかも知らないし…

(あとで聞いたら林道の終点まで車で荷上げだけしてくれるって話でそれにも遅れた)
歩いて赤岳鉱泉(標高 2,300m)に向かうことを知ってめまいがした。

みんなが快適な山小屋泊をする中、我々はなぜかテント泊を選択。装備はほぼ全装状態なのです。

しかも送迎車でのコンペ会場入りをイメージしていた私は、クライミングギアを手さげバックで持参するという無能ぶり。